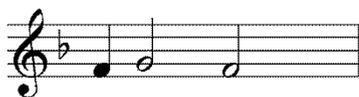


【 復活讃詞 第2調 】

しせざるいのちよ、なんぢしにくだりしとき、かみのせいの
死 生 命 爾 死 降 時 き、かみのせいの
ひかりにてぢごくをころせり。しせしものをちかより
光 地 獄 殺 り。死 者 地 下
ふくかつせしめしとき、てんぐんみなよびていへり、
復 活 時 き、天 軍 皆 呼 び て 日
いのちをたもうしゅハリストスわが神みよ、こうえいはなんぢに
生 命 賜 主 吾 神 光 榮 是 爾 ち に
き 歸 す。

【 日本の亜使徒ニコライの讃詞 】

こうえいはちちとことせいしんにきす、いまもいつもよよに、アミン。
光 榮 父 子 聖 神 歸 今 何 時 世 世
しととひとしくどうぎなるものちゅうじつにしてしんちなる
使 徒 等 同 座 者 忠 實 に して 神 智
ハリストスのえきしゃ、せいなるしんにえられたるふえ、ハリストスの
役 者 聖 神 撰 笛
あいにみちたるうつわ、わがくにのこうしようしゃ、
愛 満 器 我 國 光 照 者
あしとしゅきょうせいニコライよ、なんぢのぼくぐんのたため、
亜 使 徒 主 教 聖 爾 羊 群 爲
およびぜんせかいのたために、いのちをたもうせいさんやにいのり
及 全 世 界 爲 め に、生 命 賜 聖 三 者 祈



たまえ。

司祭) (黙誦：聖なる神、聖者の中に息い、セラフィムより聖三の聲を以て歌頌せられ、

ヘルヴィムより讚榮せられ、悉くの天軍より伏拜せられ、萬物を無より有と

なし、人を爾の像と肖とに依りて造り、爾が諸の賜を以て之を飾り、

願う者に智慧と明悟とを與え、罪を行つる者を棄てずして、其救の爲に痛悔

を立て、我等卑しくして不當なる爾の諸僕を、此の時に於ても、爾が聖な

る祭壇の光榮の前に立ちて、爾に當然の伏拜讚榮を奉るに堪うる者と

なしし主宰よ、爾親ら我等罪人の口よりも聖三の歌を受け、爾の仁慈を

以て我等に臨み、我等に凡そ自由と自由ならざる罪を赦し、我が靈と體と

を聖にし、我等に生涯善功を以て爾に務むるを得せしめ給え、聖なる

生神女と古世より爾の喜を爲しし諸聖人との祈禱に依りてなり、)

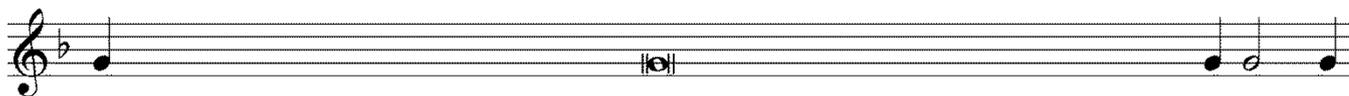
司祭) 蓋我が神よ、爾は聖なり、我等光榮を爾父と子と聖神に献ず、今も何時も世世

に、

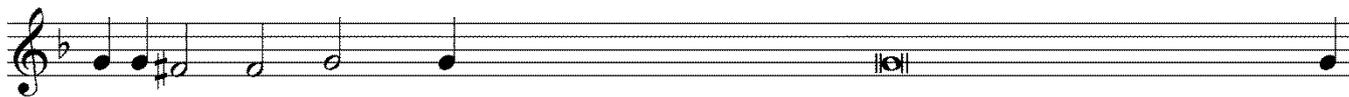


アミン。

【 聖三祝文 】



聖なるかみ、聖なるゆうき、聖なるじょうせいのもよ、われらを



あわれめよ。聖なるかみ、聖なるゆうき、聖なるじょうせいの



ものよ、われらをあわれめよ。聖なるかみ、聖なるゆうき、



せいなるじょうせいのものよ、われらをあわれめよ。
 聖常生者我等を憐



こうえいはちとことせいしんにきすいまもいつもよよにアミン。
 光榮父子聖神歸今何時も世世にアミン。



せいなるじょうせいのものよ、われらをあわれめよ。
 聖常生者我等を憐



せいなるかみ、せいなるゆうき、せいなるじょうせいのものよ、
 聖なる神、聖なる勇毅、聖なる常生者



われらをあわれめよ。
 我等を憐

司祭) (黙誦: ^{しゅ な よ き もの あが ほ}主の名に依りて來たる者は崇め讃めらる、^{ざ もの なんぢ そのくに}ヘルヴィムに座する者よ、爾は其國

^{こうえい ほうざ あ つね あが ほ}の光榮の寶座に在りて恒に崇め讃めらる、^{いま いつ よよ}今も何時も世世に、)

【 提綱 (プロキメン) 主日第2調 】

司祭) ^{つつし き しゅうじん へいあん} 慎みて聽くべし、衆人に平安、



なんぢのしんにも。
 爾神

司祭) ^{えいち} 睿智、

誦經) ^{しゅ わ ちから わ うた かれ わ すくい} プロキメン、主は、我が力、我が歌なり、彼は我が救となれり、



しゅはわがちから、わがうたなり、かれはわがすくいとなれり。
 主我力我歌彼我救

誦經) ^{しゅ きび われ ばつ われ し わた} 主は厳しく我を罰したれども、我を死に付さざりき、



しゅはわがちから、わがうたなり、かれはわがすくいとなれり。
 主我力我歌彼我救

誦經) ^{しゅ わ ちから わ うた} 主は、我が力、我が歌なり、



【 使徒經 (アポストロス) 141 端 コリント前書 9 章 2~12 節 】

司祭) ^{えいち} 睿智、

誦經) ^{せいしと じん たつ ぜんしょ よみ} 聖使徒パウエルがコリント人に達する前書の讀、

司祭) ^{つつし き} 謹みて聽くべし、

誦經) ^{けいてい なんぢら しゅ おい われ しとしよく いん われ ぎ もの わ こた ところこれ} 兄弟よ、爾等は主に於て我の使徒職の印なり。我を議する者に我が答うる所是

^{われらあにくら の けん われらあにしまい つま たづさ た しとおよ しゅ} なり。我等豈食い飲むに權なきか。我等豈姉妹なる妻を攜うること、他の使徒及び主の

^{けいてい およ ごと しか けん そもそもひとりわれ こうさく けん} 兄弟、及びキファの如く然る權なきか。抑獨我とヴァルナヴァとは工作せざる權な

^{だれ ぐんし な おのれ きゆうやう もつ つと だれ ぶどう う そのみ くら} きか。誰か軍士と爲りて、己の給養を以て勤むるをせん。誰か葡萄を樹えて、其果を食

^{だれ むれ ぼく むれ ちち くら われただひと じょう したが これ い りっ} わざらん。誰か群を牧して、羣の乳を食わざらん。我唯人の情に循いて之を言うか。律

^{ぼう またか い あら けだし りっぼう しる いわ こくもつ ふ おと うし ぐち} 法も亦斯く言うに非ずや。蓋モイセイの律法に録して云く、穀物を踐み落す牛には口を

^{と なか かみ うし ため おもんばか そもそもこれ い こと われら ため こ} 閉づる勿れと。神は牛の爲に慮るか。抑之を言うは、特に我等の爲にするか。是れ

^{われら ため しる けだしたがえ もの のぞみ たがえ こくもつ ふ おと もの その} 我等の爲に録されたり、蓋耕す者は、望ありて耕すべし、穀物を踐み落す者は、其

^{きぼう ところ う のぞみ これ な も われなんぢら うち しん ぞく もの ま} 希望する所を獲る望ありて之を爲すべし。若し我爾等の中に神に屬する物を播きたら

^{なんぢら み ぞく もの か あにだいじ も たにんこ けん なんぢら うち え} ば爾等の身に屬する物を獲るは、豈大事ならんや。若し他人此の權を爾等の中に獲ば、

^{いわん われら しか われら こ けん もち すなわちおよそ こと しの} 況や我等をや。然れども我等は此の權を用いざりき、乃凡の事を忍ぶ、ハリストス

^{ふくいん いささか さまたげ お ため} の福音に聊も阻礙を置かざらん爲なり。

(比較用 口語訳)

あなたがたが主にあることは、わたしの使徒職の印なのである。わたしの批判者たちに対する弁明は、これである。わたしたちには、飲み食いをする権利がないのか。わたしたちには、ほかの使徒たちや主の兄弟たちやケパのように、信者である妻を連れて歩く権利がないのか。それとも、わたしとバルナバとだけには、労働をせずにいる権利がないのか。いったい、自分で費用を出して軍隊に加わる者がある

うか。ぶどう畑を作っていて、その実を食べない者があろうか。また、羊を飼っていて、その乳を飲まない者があろうか。わたしは、人間の考えでこう言うのではない。律法もまた、そのように言っているではないか。すなわち、モーセの律法に、「穀物をこなしている牛に、くつこをかけてはならない」と書いてある。神は、牛のことを心にかけておられるのだろうか。それとも、もっぱら、わたしたちのために言っておられるのか。もちろん、それはわたしたちのためにしるされたのである。すなわち、耕す者は望みをもって耕し、穀物をこなす者は、その分け前をもらう望みをもってこなすのである。もしわたしたちが、あなたがたのために霊のものをまいたのなら、肉のものをあなたがたから刈り取るのは、行き過ぎだろうか。もしほかの人々が、あなたがたに対するこの権利にあずかっているとすれば、わたしたちはなおさらのことではないか。しかしわたしたちは、この権利を利用せず、かえってキリストの福音の妨げにならないようにと、すべてのことを忍んでいる。

司祭) ^{なんぢ} 爾 ^{へいあん} に平安、

誦經) ^{なんぢ} 爾 ^{しん} の神にも、ア ril l i ya、

【 ア ril l i ya 主日第2調 】

司祭) ^{えいち} 睿智、



ア ril l i ya、ア ril l i ya、ア ril l i ya。

誦經) ^{ねが} 願わくは主は ^{しゅ} 憂 ^{うれい} の日に於て ^ひ 爾 ^{おい} に聴き、^{なんぢ} イアコフの神の名は ^{かみ} 爾 ^な を扨ぎ衛らん、^{なんぢ} ^{ふせ} ^{まも}



ア ril l i ya、ア ril l i ya、ア ril l i ya。

誦經) ^{しゅ} 主よ、^{おう} 王を救え、^{すく} 又我等が ^{またわれら} 爾 ^{なんぢ} に呼ばん時、^よ 我等に聴き ^{とき} 給え、^{われら} ^き ^{たま}



ア ril l i ya、ア ril l i ya、ア ril l i ya。

司祭) (黙誦: ^{ひと} 人を愛する主 ^{あい} 宰よ、^{しゅさい} 我が ^わ 心 ^{こころ} に神を知る ^{かみ} 智慧の ^し 浄 ^{ちえ} き ^い 光 ^い を輝 ^ぎ かし、^{ひかり} 我が ^{かがや} 思念 ^わ ^{しねん}

^め の目を啓きて、^{ひら} 爾 ^{なんぢ} が福音の ^{ふくいん} 教 ^{おしえ} を悟らしめ ^{さと} 給え、^{たま} 我が ^わ 衷 ^{うち} に ^{なんぢ} 爾 ^{ふく} の福たる ^い 誠 ^{ましめ} を

^{おそ} 畏るる ^{おそれ} 畏 ^い をも入れて、^{われら} 我等が ^{ことごと} 悉 ^{にくたい} くの肉體の ^{よく} 慾 ^ふ を踏み、^{およ} 凡 ^{なんぢ} そ ^{よろこ} 爾 ^{ところ} の喜 ^ぶ ぶ ^所 所

^{おも} を思い ^か 且 ^{おこな} つ ^{ぞくしん} 行 ^{せい} いて、^す 屬 ^{いた} 神の ^{たま} 生活 ^{けだし} を過ぐる ^{かみ} を致 ^{かみ} させ ^{かみ} 給え、^{かみ} 蓋 ^{かみ} ハリ ^{かみ} スト ^{かみ} ス神 ^{かみ} よ、

なんぢ わ たましい からだ こうしょう われらなんぢ なんぢ むげん ちち しせいしぜん
爾は我が 靈と體との光 照なり、我等 爾と爾の無原の父と至聖至善にし

いのち ほどこ なんぢ しん こうえい けん いま いつ よよ
て生命を 施す 爾の神とに光 榮を 獻ず、今も何時も 世に、アミン。)

【 福音經 (エヴァンゲリオン) マトフェイ福音書 77 端 18 章 23~35 節 】

司祭) 睿智、 肅みて立て聖福音經を聴くべし、 衆人に平安、



なんぢのしんにも。
爾 神

司祭) マトフェイ傳の聖福音經の讀、



しゅよ、こうえいはなんぢにきし、こうえいはなんぢにきす。
主 光 榮 爾 に 歸 し、 光 榮 爾 に 歸 す。

司祭) 謹みて聴くべし、

司祭) 主は左の譬を設けて曰えり、天國は、其諸僕と會計せしを欲せし君王に似たり。會

計を始めし時、一千萬金の債ある者を彼に曳き來れるあり。其償うこと能わざる

に困りて、主は彼の身と、其妻子と、其悉くの所有とを鬻ぎて、償わんことを命ぜ

り。其僕俯伏して、彼を拜して曰えり、主よ、我を寛うせよ、我盡く爾に償わん。

其僕の主は憐みて、彼を釋ち、彼に債を免せり。其僕出でて、一人の同僚の、己に

銀一百の債ある者に遇いて、之を執え、喉を扼めて曰えり、爾が負う所を我に償

え。其同僚彼の足下に俯伏して、求めて曰えり、我を寛うせよ、我盡く爾に償わ

ん。然れども、彼肯わず、乃往きて、其債を償うに至るまで、之を獄に下せり。

佗の同僚之を見て、甚憂い、來りて有りし所を悉く主に告げたり。其時主は彼を

召して曰く、惡しき僕よ、爾我に求めしに困りて、我其債を悉く爾に免せり、我

が爾を憐みし如く、爾も亦爾の同僚を憐むべきに非ずや。主乃怒りて、其

悉くの債を償うに至るまで、彼を獄吏に付せり。若し爾等各其心より己

の兄弟に其罪を免さずば、我が天の父も亦斯くの如く爾等に行わん。

(比較用 口語訳)

天国は王が僕たちと決算をするようなものだ。決算が始まると、一万タラントの負債のある者が、王のところに連れられてきた。しかし、返せなかったので、主人は、その人自身とその妻子と持ち物全部とを売って返すように命じた。そこで、この僕はひれ伏して哀願した、『どうぞお待ちください。全部お返しいたしますから』。僕の主人はあわれに思って、彼をゆるし、その負債を免じてやった。その僕が出て行くと、百デナリを貸しているひとりの仲間に出会い、彼をつかまえ、首をしめて『借金を返せ』と言った。そこでこの仲間はひれ伏し、『どうか待ってくれ。返すから』と言って頼んだ。しかし承知せずに、その人をひっぱって行って、借金を返すまで獄に入れた。その人の仲間たちは、この様子を見て、非常に心をいため、行ってそのことをのこらず主人に話した。そこでこの主人は彼を呼びつけて言った、『悪い僕、わたしに願ったからこそ、あの負債を全部ゆるしてやったのだ。わたしがあわれんでやったように、あの仲間をあわれんでやるべきではなかったか』。そして主人は立腹して、負債全部を返してしまうまで、彼を獄吏に引きわたした。あなたがためいめいも、もし心から兄弟をゆるさないならば、わたしの天の父もまたあなたがたに対して、そのようになさるであろう」。

しゅよ、こうえいはなんちにきす。
 主 光 榮 爾 歸 し、 光 榮 爾 歸 す。